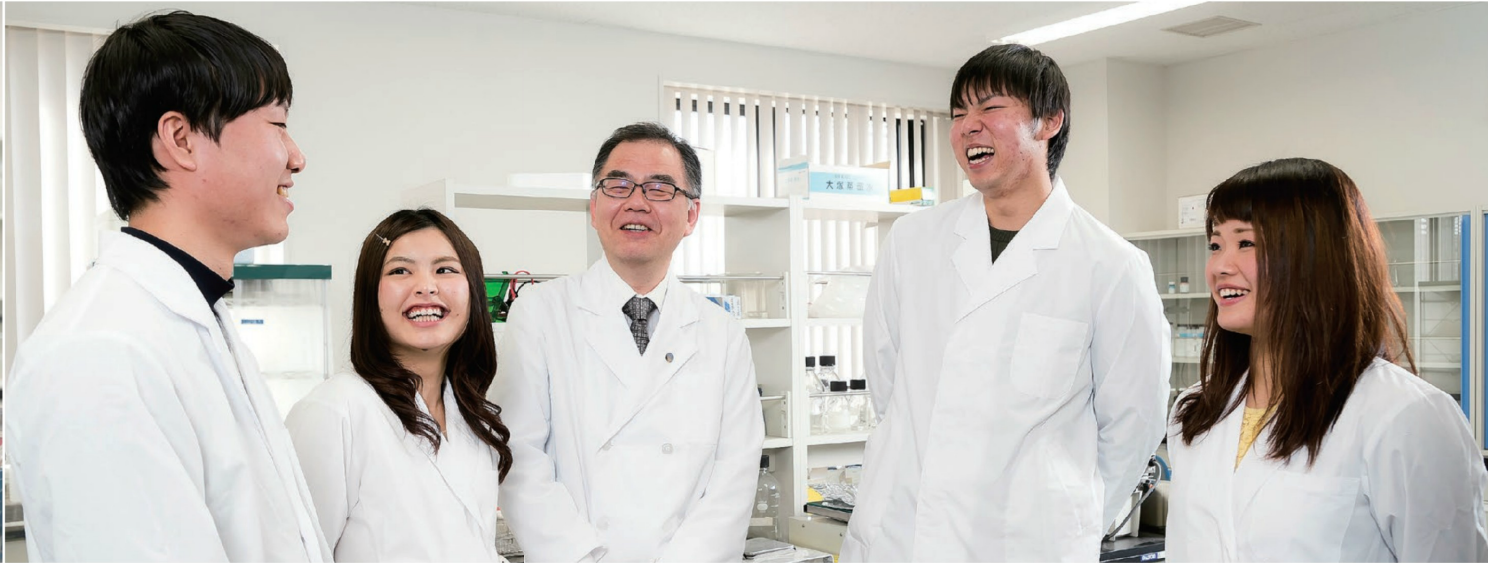




研究テーマによっては実験に加え、薬の使用行動を分析するため一般の人を対象にアンケート調査を行うことも。



少数精鋭で、年次を越えて密に接することができるのも医療薬学研究室の魅力。実習や試験の打ち上げなど、節目ごとに食事会などを行って親睦を深めている。



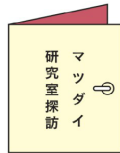
4年次生  
黒河 幸朗さん  
KUROKAWA Yukiro



5年次生  
安藤 里紗さん  
ANDO Risa



薬学部教授  
山口 巧  
YAMAGUCHI Takumi



# 医療薬学 研究室

## 薬学部医療薬学科

調剤室からベッドサイドへ。  
医療の最前線で求められる知識と経験を身につけ、  
細やかなケアができる薬剤師を目指す。

臨床現場で生きている  
問題解決の糸口を研究室から

近年、薬剤師は薬局や病院内での調剤業務等に留まらず、より近い存在で患者と向き合うことが求められている。それに伴い、薬学教育も調剤室からベッドサイドへと、実学への転換を図っている。医療薬学研究室では、病院薬剤師経験を持つ山口教授のもと、臨床現場で生きている問題について解決の糸口を見出すことをテーマに研究している。「特に医薬品による副作用の軽減と、患者や医薬品使用者の不都合（リスク）を軽減するため、現場の薬剤師とのつながりを大切にしながら、一緒に研究を進めています」と山口教授。よって、医療薬学研究室を志望するのは、将来、病院や保険薬局などの臨床現場で薬剤師として活躍したいという希望を持つ学生が多い。

最先端の臨床現場から刺激を受ける環境  
具体的な研究テーマは「抗がん剤の新たな投与方法による患者の身体的負担の軽減」、そして「医薬品に対する意識と医薬品使用時の対応行動の関係性に関する解析」。愛媛大学医学部附属病院薬剤部や保険薬局の薬剤師と共同研究を行っている。学生たちは「研究がどのように患者の治療に活かされていくのか」「研究室で出たデータをいかに臨床現場に活かしていくのか」を常に考えながら答えを探っていくという。

「放射線治療をした際に患者に起こる小腸粘膜障害などの予防研究」を行っている4年次生の黒河さんは「現場で活躍されている薬剤師の方との共同研究は勉強になることが多く、今まで知らなかった医療における問題点が、先生の勤めで卒業研究について発表をしたことで自信が付き、大きく一歩前進できました。薬剤師になったら、緩和ケアについての学びをさらに深く、認定薬剤師を目指したいです」と話してくれた。そんな学生の成長を日々感じているという山口教授は「社会に出て患者さんと接するとき、心を許してもらえ存在になるには、患者さんと同じ観点を持ち、コミュニケーションを図ることが大切です。そのためにも、学生時代には勉学もいろんな経験もして幅広い知識を身につけてほしいと思います」と学生への期待を寄せた。

私たちが医療薬学研究室を大好きな理由  
山口教授は薬学部のカウンセラー  
なんでも相談できる存在です！

- 人生経験豊富な先生は父親的存在。勉強以外の相談もしやすく、恋愛相談をしたことも(笑)。
- 研究室はとても居心地がよく、少数人数なので全員と気さくに接することができます。

